

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

平成 14 年度厚生科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業
「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」

育児不安に対する多文化保育の影響と効果
－ 多文化保育を行っている S 保育園での実践から－

李 節子 東京女子医科大学大学院看護学研究科助教授
井上千尋 東京女子医科大学看護学部
牛島廣治 東京大学大学院医学系研究科発達医科学教室教授

研究要旨

多文化保育を行っている保育園において母親と保育士を対象に、質問紙による調査と半構造化面接調査を行い、韓国人と日本人の育児不安と影響する要因、その支援について検討した。

韓国人と日本人に共通する育児不安の内容としては、「自分の子育てが正しかったのかわからない」「親として良くないと思う」「仕事との両立の困難さ」が挙げられ、外国人特有の内容は、言語の問題、子どものカルチャーショック、イジメの問題、子どものアイデンティティに関する不安、日本に慣れなければいけないという不安、就学手続きなどの公的手続きがわからない不安、であった。

育児不安に影響を及ぼす要因は、人的ネットワーク、日本語に関する辛い経験、子どもと母親のアイデンティティの状態、生活上の不安、であった。子育て観や方法の違い、文化や習慣の違いは育児不安の大きな要因にはなっていなかった。多文化保育の中で自分たちの文化や考え方が尊重されているので、これらの違いが、育児不安に影響するほどの問題にはなっていないと推察された。

母親の育児不安に対する支援として、多文化保育の実践、多文化保育以外の通常の保育活動の充実、保護者同士の交流が挙げられた。多文化保育の実践、すなわち、子どものアイデンティティを形成する本名や母語、文化を尊重し、保育園の中で「当たり前」に名前を名乗り挨拶をすること、「名前が母語で書いてあること」「母親自身の参加を促しながら、母親の文化や習慣を保育園の活動の中に取り入れること」は、母子のアイデンティティの安定につながり、育児不安を軽減させるものであった。本研究により、多民族文化社会における子育て支援として、多文化保育の実践とその普及の必要性が示唆された。

A はじめに

1980 年代後半以降、日本で暮らす在日外国人の人口は急増し、現在約 200 万人の外国人が日本で暮らしている。日本で暮らす子どもや子育てをしている母親も増加し、多民族文化社会における子育ては、母子保健の中でも大きな問題の 1 つとなっている。

外国人児童の保育の現場においては、言

葉、日常生活習慣の相違や子ども達の適応、友だちとの関係作りなど、多くの問題が挙げられている^{1)~4)}。一方、マイノリティと言われる在日外国人の母親は、多くの育児不安を抱えていると推察されるが、彼女らが抱える育児不安の実態と、影響を及ぼす要因などに関する検討は未だ不十分である。

このような状況の中、外国籍園児が多く

通っている堺市や大阪市の保育園、今回研究対象としたS保育園など一部の保育園で、多文化保育の先駆的な取り組みがなされている。しかし、そういった保育活動の実際やその影響・効果については評価されていない。

本研究は、多文化保育を行っている保育園において、韓国人と日本人の育児不安の実態と、多文化保育の影響と効果について考察し、多民族文化社会における子育て支援のあり方についての検討を行った。

B S 保育園の設立経緯と概要

本研究において対象としたS保育園は、京浜工業地帯Z市にある私立認可保育園である。Z市には主に第1次世界大戦以降、相次いで建設された工場や臨海部の埋め立て工事の労働力として、朝鮮人が住み始めるようになった。第1次世界大戦前から戦時中は、軍事施設の建設および工業生産の拡大により、朝鮮人人口が急増した。Z市は歴史的にも在日韓国・朝鮮人の多住地域であるが、近年はニューカマーと呼ばれる人口も急増し、地域社会を形成している⁵⁾。

S保育園は、1969年に無認可保育園として開設された。当時日本の保育園に入園を拒否された在日韓国・朝鮮人の子ども達のために、在日大韓キリスト教教会が母体となり設立された。その後1974年には認可保育園となり、現在に至る。キリスト教精神に基づき「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」を基本理念として保育を進めている。

近年は日本人、在日韓国・朝鮮人だけでなく、ブラジル、ペルー、フィリピン、中国など、多様なルーツをもった子ども達が増加しており、園児の約6割が外国にルーツを持つ子ども達である。そういった人々が自らの民族を恥じることなく、いきいき

と生き、自立できるような「共に生きる」保育を実践している。民族や文化の違い、また、あらゆる障害を認め合い、子ども達や保護者が明日への希望を持ち、他者を思い励まし合い、人として自立できる保育の営みを方針としている。現在、S保育園では、0歳から6歳まで60名の保育を行っている。

S保育園の活動の特徴と概要を表1に示す。

C 韓国人と日本人の育児不安と要因、支援の検討

C-1 目的

韓国人と日本人の育児不安と支援について、当事者の立場から検討する。

C-2 方法

1. 対象

S保育園に子どもが通園している韓国人一世（以下韓国人と略す）の母親と日本人の母親を対象とした。子どもの年齢は3歳から6歳とし、1人の母親が育てている子どもの数、パートナーの国籍は問わないこととした。

研究協力に同意した韓国人の母親3名と日本人の母親3名を対象とした。

韓国人、日本人ともパートナーは同国出身、全家族が核家族であった。また、子どもに治療を要する疾患や発達遅れなどがある母親はいなかった。1人の母親が育てている子どもの数については、韓国人の母親1名が子ども1人であったが、韓国人の母親2名、日本人の母親3名は2人以上の子どもを育てていた。

韓国人の在日年数は、10年以上、約7年が各々1名、1年未満が1名（ただし学生として数年間の在日経験あり）であり、全員日本語での会話が可能であった。子ども

は、日本生まれが2名、韓国生まれで在日数カ月の子どもが1名であった。

2. 調査方法

1) 質問紙調査票による調査

「子ども総研式育児支援質問紙」⁶⁾に改良を加え(以下「総研式質問紙」と記す)対象者の育児不安の程度と要因について検討した。韓国人にはハングルと日本語の併記版、日本人には日本語版の質問紙を作成した。主な質問項目は以下の通りである。

- (1) 育児困難感 (育児への心配・困惑・不適格感)
- (2) 育児困難感 (子どもへのネガティブな感情・攻撃衝動性)
- (3) 母親の抑うつ傾向
- (4) 子どもの心身
- (5) 子どもの育て難さ(Difficult Baby)
- (6) 「子育てについて相談できる人」
- (7) 自由記載「現在子育てについて悩んでいることや心配なこと、意見」

「言語の問題」

「習慣や文化」

「子どものアイデンティティ」

「夫やパートナー、ご家族のこと」

(8) 母親の基本的事項

母親の年齢、在日年数

パートナーの国籍、年齢

子どもの年齢、数、

家庭での会話言語

母親の日本語能力 など

以上の質問紙を、副園長を通して手渡しして配布、回収した。

2) 半構造化面接調査

質問紙を回収できた対象者に、面接調査を依頼し、同意の得られた韓国人の母親3名、日本人1名に、半構造化インタビュー法による面接調査を実施した。

韓国人にはハングルと日本語の併記、日本人には日本語のインタビューガイドを手渡し、日本語で質問した。

面接調査では、得られた結果について調査者が守秘義務を負っていること、答えたくない内容は答えなくても良いこと、途中で不都合が起きた場合は中断しても構わないことを説明し、信頼関係が十分に得られた時点で調査を開始した。礼節をわきまえ、話しやすい雰囲気で行うよう心がけた。また対象者の同意を得、インタビュー内容はテープに録音した。

韓国人に対しては、母語以外のインタビューであったため、わかりやすい言葉でゆっくり話し、質問内容が伝わっているかどうか、その都度確認するよう心がけた。相手の日本語が分かりにくい場合は、再度質問し確認した。

調査期間は、2002年10月1日から12月10日、1人当たりの面接時間は1時間から1時間20分であった。主な調査項目は以下の通りである。

(1) 文化や習慣の異なる社会での子育てについて

(2) 保育園での養育や支援についての意見

(3) 保育園以外の社会や行政に望むこと

3. 分析方法

1) 「総研式質問紙」を用いた調査では、「子ども総研式育児支援質問紙の手引き」に準じて評価した。

2) 自由記載については、ハングルで記載してある場合は、翻訳家(韓国人一世)に日本語訳を依頼した。内容は、各項目毎にすべて書き出した。

3) 面接内容は、事例の背景の多様性と個別性を重視し、事例毎に、内容分析(Content Analysis)に基づいたフレームワーク法⁷⁾を用いて分析した。事例毎にすべての面接内容を分析し、質的データを分析するためのカギとなる問題、概念、話題を拾い出し、分析と索引づけを行った上で、その索引項目毎に内容を要約した。

自由記載および面接内容の検討、索引づけと分析は、共同研究者が相互の合意形成を図りながら行った。

4) 自由記載まで記載のあった事例、あるいは面接調査まで実施できた5事例(韓国人3名、日本人2名)について、事例毎に自由記載と面接内容から、育児不安と要因、支援について考察を加えた。

C-3 結果 育児不安と要因、支援

「総研式質問紙」による調査では、育児不安の程度は、韓国人日本人とも特徴的な傾向は認められなかった。

自由記載内容は、個人のプライバシーに関わると思われる内容以外はすべて書き出した(表2、3)。また、面接調査内容は分析方法に沿って要約した(資料)。

韓国人では、面接内容に沿う索引項目としてA子育て不安、B子育て観の違い、C子育て方法の違い、D子育ての経験、E育児情報、Fネットワーク、G文化や習慣、H子どものアイデンティティ、I自分のアイデンティティ、J保育園の関わり、K家族の支援、L日本社会と外国人が挙げられた。

日本人では、1名に面接協力が得られ面接調査を行った。面接内容に沿う索引項目としてA子育て不安、B子育て観の違い、C子育て方法の違い、D子育ての経験、Fネットワーク、G文化や習慣、H子どものアイデンティティ、I自分のアイデンティティ、J保育園の関わり、K家族の支援、L日本社会と行政が挙げられた。育児情報に該当するような意見は聞かれなかった。

C-4 考察

1. 育児不安と要因、支援の検討

1) 育児不安の内容

(1) 韓国人、日本人共通の育児不安

韓国人と日本人に共通する育児不安として「自分の子育てが正しかったのかわから

ない」あるいは「親として良くないと思う」「仕事が忙しくて子どもに構えない」という内容が挙げられた。「親として良くないと思う」は川井ら⁶⁾の「母親としての不適格感」に通じるものであり、仕事との両立の困難さは、日本で働くブラジル人を対象とした先行研究でも述べられている⁸⁾。国籍に関わらず起こりうる不安であると言えた。

(2) 韓国人特有の育児不安

外国での子育て特有の内容として、言語の問題、子どものカルチャーショック、イジメの問題、子どものアイデンティティの問題が挙げられた。

言葉の問題では、「ハングルを話さない」「ハングルを忘れてしまう」という不安、自分が日本語の能力が低いので子どもに教えられない不安も挙げられていた。これらは外国人特有の、しかも起こりやすい不安であると思われた。

言葉の問題について、他には「自宅で母語を使うことの妥当性に関する不安」があった。子どもが韓国生まれで、突然日本にやって来て日本語を覚えなくてはならない場合、自宅と保育園の使用言語が違うことは子どもにとっても負担である。そのような中、ハングルを忘れないために自宅でハングルを使うという手段を選ぶのは、親にとっては大きな決断を迫られることである。また、ぜひハングルを覚えて欲しいと思っている母親や、いずれ帰国を考えている母親にとって、子どもがなかなかハングルを話さないと、「もっとよい方法があるのではないか」という不安にも繋がるであろう。

子どものカルチャーショックと、それに対する母親の不安は、共に重大な問題である。母親に在日経験があったり、来日理由が親の仕事の都合である場合は、子どもに対する負い目が加わってくると推察された。

子どもが韓国人ということはいじめられるのではないが、あるいはいじめられている

という不安以外に、帰国を考えている母親の場合は、帰国後にいじめられるのではないかという不安があることが明らかとなった。仕事の都合で居住地を移動していく母子の場合は、常にマイノリティであることが多く、子どもが置かれる環境も厳しい可能性がある。このような問題に対しては、マイノリティである韓国人を対象とした支援だけでは不十分で、周囲のマジョリティである日本人に対しても目を向ける必要がある。

子どものアイデンティティに関しては、「自分と同じように韓国人として育てて欲しい」と願う親ばかりではないことが明らかとなった。自分と異なること、つまり「韓国人としてのアイデンティティが形成できないこと」が不安になる場合と、親のアイデンティティと異なっても「日本と韓国、半分半分」と思っていることに満足している場合がある。「韓国人として、日本人としてというより、自分らしく育てて欲しい」が、「将来、親の意見と合わなくなるのではないか」というように、親の思いは複雑であった。子どものアイデンティティについては、「親と異なる」もしくは「親の期待と異なってしまう」不安と言えた。

親は子どもに対して様々な期待をするものであるが、「アイデンティティに関する期待と不安」は、外国人特有のものであると考えられた。韓国人の母親が、子どものアイデンティティに対して柔軟な考えを持てるのは、多文化保育を行っている保育園に通っていて、自文化を尊重されていることや、色々なルーツの子ども達や親たちと接している影響であると思われた。

2) 育児不安の要因

(1) 韓国人、日本人共通の育児不安要因

国籍に関わらず共通する要因として、精神的な拠り所となる人的ネットワークが挙げられた。これは多くの先行研究と一致す

るものであった。そのネットワークは、情報交換や助け合いのみならず、精神的な安定や自分の子育てに対する承認、アイデンティティの安定にもつながる。それには同じ価値観を持っている人であることが望ましい。特に外国人の場合、日本人の中では「合わせてしまう」意識が働く可能性があることや、文化や習慣の違いで戸惑ったときの意志決定の必要性を考慮すると、やはり同国人であることが条件であると思われた。

日本人の事例では、「生活への不安」が挙げられていた。現在の社会制度や不景気を反映したものだと考えられる。今回は韓国人の母親は挙げていなかったが、外国人は社会的・経済的に不安定な立場であることも多く⁹⁾、国籍に関わらず要因となりうるものであると推察される。

(2) 韓国人特有の育児不安

外国人特有の育児不安の要因としては、育児不安の内容に直接結びつくような経験、例えば「日本語が読めなくて辛い思いをした経験」が挙げられる。本研究では、日本語の会話ができる対象者であったが、日本語のコンプレックスや不安を抱えた母親にとっては、「言葉の違い」より直接「日本語ができないことを子どもに指摘された経験」が、大きな要因として考えられた。

子どものアイデンティティが親の期待通りか、またカルチャーショックがなく安定しているかという「子どものアイデンティティの状態」は、要因としても育児不安に影響してくると思われた。そして親自身の「子どものアイデンティティに対する考え方、要求の高さや柔軟性」も育児不安に影響を及ぼす。

一方、母親のアイデンティティの状態も大きな要因であった。在日年数が短いほど育児不安が強いという研究⁸⁾もあるが、本研究では必ずしもそうではなく、たとえ在

日年数が長くても、母親のアイデンティティが不安定であれば育児不安が高くなると示唆された。在日年数や日本語の能力は1つの基準にしか過ぎず、母親が安定したアイデンティティを持っているか否かが重要であると思われた。

「子どものアイデンティティに対する親の考え方」には、親自身のアイデンティティや自分のアイデンティティに対する考え方が影響する。母親のアイデンティティが不安定であれば、子どものアイデンティティに対する要求が強く、育児不安も高くなる。母親のアイデンティティが安定し、精神的に安定していれば、子どものアイデンティティに対しても柔軟な考え方で対応でき、育児不安も低いと推察された。母親のアイデンティティが安定するには、子どものアイデンティティ、それが現れる言動や行動が重要な因子であり、これらは複雑に影響しあうと思われた。

(3) 子育て観や方法の違い、文化や習慣の違いと育児不安の関係

子育て観や方法の違い、文化や習慣の違いは、先行研究で良く取りあげられる。しかし本研究では、韓国人の場合も日本人の場合も、育児不安に直接影響はしていない。違いを認識しないこともあり、また本人に選択できる力や環境が整っており、慣れることができたり、相談できる相手が身近にいれば、大きな要因にはならない。

本調査において、韓国人の母親のS保育園への高い満足感や安心感、信頼感、保育園の現状から判断すると、多文化保育の中で自分たちの文化や考え方が尊重されているので、これらの違いが、育児不安に影響するほどの問題にはなっていないと推察された。

しかし、本人に「合わせる意識」が強くなり、異文化による子どもの教育への影響が強くなり親が許容できない場合には、

育児不安に影響する。

3) 当事者からみた支援の評価

本研究において多文化保育を行っているS保育園で育児不安に対する支援について考察すると、以下の3点が確認された。

「多文化保育」の保育活動による効果

「多文化保育」という活動のなかで、韓国人の母親の評価が特に高かったのは、韓国の言葉を大事にして挨拶などをハングルで行っていること、子どもの名前をハングルで記載していること、行事等、ことあるごとに、子どもに韓国の文化を伝えていることである。これらは、子どものアイデンティティ形成だけでなく、母親のアイデンティティも安定させる効果が認められた。先行研究で挙がるような「保育園内での文化の違い」が育児不安の内容として挙がらなかったのは、多文化保育の効果と言える。

日本人の母親は「大人になって、いきなり多文化と言われても無理」であり、挨拶や名前など「公平性が認識できる程度」は良いが、行事に大きく組み込まれると抵抗感が強いようであった。「多文化保育」の困難さを認識させられるものであった。

多様なルーツを持った子どもが集まることによる効果

多様なルーツを持つ子どもが集まることにより、保育士も子ども達も「異文化」に慣れているので、適切な関わりが期待できること、自分の文化やアイデンティティを自覚できること、「自分と異なる人たち」を自然に受け入れられることなど、多くの効果が認められた。この効果により、ますます多様なルーツをもつ子ども達が集まるというサイクルが生まれているのだと思われる。またこのような効果は、日本人も韓国人も認識していた。

多文化保育に関わらず行われている保育活動の効果

多文化保育に関わらず行われている、し

つけや生活のけじめ、お帳面による交流、自然と親しむなどの保育活動、忙しい母親への配慮などは、国籍に関わらず重要な関わりだと思われた。自然と親しむことについては、今回このように回答した韓国人の母親が、韓国でも都会に住んでいたためとも考えられる。どこの国籍であろうと「やってはいけないこと」と「やるべきこと」については、毅然とした態度で保育士が関わっており、母親の国籍に関わらず、信頼を得ていた。

子育て観や方法の違い、文化の違いや習慣は、本研究では、韓国人の場合も日本人の場合も育児不安に直接影響はしていない。韓国人の母親のS保育園への高い満足感や安心感、信頼感、保育園の現状から判断すると、多文化保育の中で自分たちの文化や考え方が尊重されているので、育児不安に影響するほどの問題にはなっていないと推察された。多文化保育が外国人の育児不安を軽減させる働きを担っていると考えられる。

D 保育者からみた韓国人と日本人の育児不安の違いと具体的支援の検討

D-1 目的

保育者からみた韓国人と日本人の育児不安の違いと具体的支援の検討を行う。

D-2 方法

1. 対象

S保育園で保育活動をしている保育士2名(S保育園での保育歴20年の保育士および3年の保育士、ともに日本人)

2. 調査方法

研究1の調査終了後、副園長を通してS保育園の保育士に面接調査を依頼し、同意の得られた保育士2名に、半構造化インタビュー法による面接調査を実施した。面接

調査では、あらかじめインタビューガイドを手渡し、得られた結果について調査者が守秘義務を負っていることを説明し、信頼関係が十分に得られた時点で調査を開始した。礼節をわきまえ、話しやすい雰囲気で行うよう心がけた。また対象者の同意を得、インタビュー内容はテープに録音した。調査時期は、2002年12月18日と20日、1人当たりの時間は1~2時間であった。主な調査項目は以下の通りである。

1) 多文化保育について

大事にしていることや配慮していること
どんな子ども達に育って欲しいと思っているか

2) 社会・文化的背景による育児不安の違いと、母親から喜ばれる支援について

3) 社会や行政に対する意見

3. 分析方法

研究1と同様に行った。

D-3 結果

保育士の面接内容から、目的に沿った内容ではA S保育園の基本理念、B 保育士として大事にしていること、C 子ども達の将来への願い、D 多文化保育の実績、E 具体的支援、F 外国人と日本人の育児不安の違い、G 多文化共生社会と保育、H 行政や社会への要望、が索引項目として抽出された。

D-4 考察

1. 保育者が考える外国人と日本人の育児不安の違い

2人の保育士のインタビュー内容から、保育者が考える外国人と日本人の育児不安について考察する。

保育士は基本的に国籍などを意識して対応しているのではないが、親には外国人ということで特有の不安があると述べている。具体的には、名前や言葉など「日本に慣れなくてはいけない」「日本風に、あるいは

日本と同じにしないでなければならない」というプレッシャーからくる不安、子どもが日本語しか話さなくなること、またそれにより、母語を話す親に反発してしまう不安、保育園以外の、例えば就学手続きなど公的機関の手続きがわからないという不安、子育て以前の生活不安、である。

日本社会は外国人に対して、意識、無意識に関わらず「適応」「同化」を求めることが多い社会だと言われている¹⁰⁾。親がかつてその様な経験をしたり聞いたりすると、我が子も、日本人と言葉や名前が違うことでいじめられるのではないかという不安から、「日本風の」通称を名乗ったり、無理に日本語を話そうとする。

言語の問題は、外国人の医療、教育に関わる問題の中で、常に指摘されている。日本語で書かれた書類や専門用語がわからないなどである。また、子どもにとっても母国文化の内面化の途上の場合、日本語の習得は逆に母国語の忘却を促し、親子間でのコミュニケーションの問題を生みだしている¹¹⁾。子どもが日本生まれであれば、両親の文化に触れる機会はほとんど無く、圧倒的に日本の文化や言語に触れる機会が多くなる。前章でも考察したとおり、この問題はますます切実になっていくと思われる。

生活不安については、亀山ら¹²⁾は、「日米とも、育児不安の高い母親の特徴としては、日常生活の中で身体の疲労感と気力の低下を感じながら、育児に対しても意欲の低下や不安の徴候を顕著に示す」と述べている。外国人の場合、仕事を1日でも休めばそのまま辞職に追い込まれる可能性が高いので、常に生活への不安が存在している場合がある^{9, 13)}。本研究でも、育児不安の要因として生活不安が考えられた。

2. 多文化保育における育児不安への具体的支援

保育士が実践している具体的な支援とし

て以下のことが挙げられる。

1) 本名と母語を尊重し、最大限使用する努力

本名と母語を大事にし挨拶などは母語で行い、家庭でも母語をつかうことを促す、保護者との連絡帳は多言語のもの（保育園が独自で作成）を使用し、母親も母語で記入できるようにする、保育園からの連絡は易しい日本語もしくはルビ、一部母語を使用する、様々な手段を使って保護者とのコンタクトをとる、などである。これらは先行文献でも述べられているものである。これらの支援は育児不安を直接軽減するとともに、子どもと母親のアイデンティティを保障するものである。本研究において、保育士もその効果を実感していることが確認された。

母親への正確な意思伝達のためには、すべて母語が望ましく、S 保育園では、行事説明など必要な場合は通訳を依頼して通訳している。

2) 母親の文化を尊重し、保育園にも取り入れる

母親が自分の文化や料理、歌などを保育園でアピールできるような場をもち、保育士も子ども達も、母親から習うようにする。しかし、その際「日本に慣れなくては」と思っている保護者が本国のことを思い出せなかったり、言い出せない場合もあるので、タイミングに気を付ける。

母語や文化を大切にすることで、その言葉や文化をもっている親が子どもの誇りになり、母親と子どものアイデンティティが安定する。先行研究でも述べられている支援の1つであるが、実際に保育士もその効果を実感している。母親からの評価も高かった支援である。

3) 日本人の保護者との交流

日本人の保護者と外国人の保護者の交流は、先行研究ではあまり触れられていない。

保護者が集まる習慣のない文化の人や必要性を感じない人に対しては、その意義や利点から説明する。ただ、日本人と外国人の交流は難しいと保育士自身も感じており、母親への調査からも同様のことが言えた。

4) 日本人保護者への配慮

「多文化保育」というと外国人を対象にしたものと捉えられがちである。実際の保育現場では、「多文化」に慣れていない日本人が抵抗感を持つこともあり、日本人が肩身の狭い思いをしないように、日本人、外国人両方の保護者への対応も重要である。

5) 生活背景に対する配慮

母親に子育ての理想論や保育園の都合を無理強いしない、責めないなど、保育園としてできる範囲内で協力している。先行文献^{9, 13)}でも、外国人の生活の苦境と、育児不安への影響が触れられている。生活が安定しないと、子育てを一緒に考える状態になれない。

保育士の中に特別なことをしているという意識はなく、保育士の苦勞と努力の賜であり、「子どもと保護者の事情に合わせ、一人一人を大事に対応する」「保護者と一緒に子どもを育てていく」という保育園の基本的姿勢が伺えた。また「わからないことを保護者が言い出せる信頼関係」の必要性を、保育士自身が実感している。

3. 多文化保育普及の課題

面接調査の結果から、保育方針が保育園によって異なり、多くの保育園は「日本になじんで」という方針をとっていることが明らかとなった。S 保育園は「特別視」されている現状である。現在、現役保育士を対象とした多文化保育に関する研修はほとんどなく、自治体によって取り組みが全く異なっている。保育士が面接の中で、「S 保育園が発信していく役割を感じている」と述べたとおり、多文化保育が「一部の保育園の特別な活動」に留まらない努力をしな

くてはならない。

E まとめ

多文化保育を行っている保育園において、その効果が明らかとなった支援は、多文化保育の実践、多文化保育以外の通常の保育活動の充実、保育者同士の交流、である。

多文化保育を普及していくためには、現役保育士への研修、保育園同士の交流と協力が今後の課題であった。

韓国人と日本人の母親の育児不安には共通する部分と、韓国人の特有の不安や要因があることが明らかとなった。

対象の母親に見られた育児不安要因の関係について、韓国人と日本人に共通する育児不安の内容としては、「自分の子育てが正しかったのかわからない」「親として良くないと思う」「仕事との両立の困難さ」が挙げられた。親としての不適格感や仕事との両立の困難さは、先行研究と一致するものであった。

外国人特有の内容は、言語の問題、子どものカルチャーショック、いじめの問題、子どものアイデンティティに関する不安、日本に慣れなければいけないという不安、就学手続きなどの公的手続きがわからない不安、が挙げられる。

言語の問題では、「母語を話さない、忘れてしまう」「日本語を教えてあげられない」という不安、「自宅で母語を使うことの妥当性への不安」が挙げられた。

子どものアイデンティティに関しては、今まで「文化や言葉の違い」と表現されてきたものであるが、それだけでは不十分で、「子どものアイデンティティが自分の期待と異なる不安」と言えた。「子どもが親に反発してしまう」不安も、深刻な子どものアイデンティティの問題である。

日本で子育てをする場合、母国と違う様々な手続きをしなくてはならないので、公的な手続きがわからないなどの保育園以外の問題は、先行研究でもよく述べられている。これを保育士が、日常保育活動の中で認識できているのは、相当な信頼関係があるからと考える。

育児不安の要因としては、以下のことを挙げることができる。

1. 人的ネットワーク

人的ネットワークは、日本人、韓国人共通の要因で、先行研究でよく挙げられている。これは、情報交換や助け合いのみならず、精神的な安定や自分の子育てに対する承認、アイデンティティの安定にもつながる。それには、同じ価値観を持っている人、同国人であることが望ましい。

2. 日本語に関する辛い経験

現在抱えている不安、例えば韓国人の母親の育児不安「子どもに日本語を教えてあげられない」に直結するような、辛い経験「日本語ができないことを子どもに指摘されたこと」は、育児不安に影響する。

3. 子どもと母親のアイデンティティ

子どもと母親のアイデンティティは、今まで「言語や文化の違い」としか述べられてこなかったが、それだけでは表現できないものである。母子のアイデンティティ、アイデンティティに対する考え方は、複雑に影響しあい、直接、間接的に育児不安に影響を及ぼす。本調査の面接内容などから考察すると、最も重要な要因であった。

4. 生活上の不安

生活上の不安は、日本人や保育士から述べられたものである。今まで外国人を対象とした先行研究では度々触れられた内容であるが、日本人を対象とした先行研究では触れられてこなかった。日本人と外国人では程度の差はあるが、現在の社会情勢を考慮すると、深刻な要因と言える。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多大なご配慮をいただいたS保育園の金性済先生、南京成根先生、ご協力いただいたお母様方、保育士の方々に心より御礼申し上げます。

文献

- 1) 新倉涼子(2001)外国人子女の保育日本人の多文化理解と共存の観点から . 千葉大学教育実践研究, 8, 225-234 .
- 2) 宮川充司、中西由里(1994)日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究() . 椛山女学園大学研究論集 25, 47-74 .
- 3) 箕浦康子(1994)異文化で育つ子ども達の文化的アイデンティティ . 教育学研究, 61(3), 9-15 .
- 4) 甘日出里美(1999)保育所における異文化間の友だち関係の微視的分析 . 保育学研究, 37(1), 43-50 .
- 5) 在日本大韓民国青年会中央本部 宣伝部(2002)「歴史を伝える運動」中間報告書2001年度版 . 在日本大韓民国青年会中央本部 .
- 6) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・恒次欽也(1997)育児不安に関する臨床的研究 育児困難感のアセスメント作成の試み . 日本総合愛育研究所紀要, 33, 35-56 .
- 7) Pope C, Mays N 編 大滝純司監訳(2001)質的研究実践ガイド 保健・医療サービス向上のために . 医学書院, 東京 .
- 8) 清水嘉子、増田末雄(2001)在日ブラジル人の母親の育児ストレス . 母性衛生, 42(2), 473-480 .
- 9) 季節子・池住圭・牛島廣治・中村安秀・井上千尋・高橋謙造(2002)無国籍状態にある子どもの出生、成育、教育環境に関する調査研究 . 平成13年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書 .
- 10) 谷口正子(1998)幼児教育における多

文化理解．李節子編，在日外国人の母子保健 日本に生きる世界の母と子．医学書院，東京，99-126．

11) ジャンジーラ前山(1998) 異文化社会への適応 在日日系ブラジル人子女の聞き取り調査から 学校教育研究,13, 318-324．

12) 亀山美津子・飯長喜一郎(1995) 母親の育児不安についての日米比較調査．家庭教育研究所紀要，17，14-21．

13) 李節子(1998) 在日外国人の母子母子保健 日本に生きる世界の母と子．医学書院．

14) 多文化子育てネットワーク，多文化子育て調査報告書，105-118．

15) 星野明子・庄司優子・大戸さとみ・川村明美・佐々木明子・桂敏樹(1998) 在日外国人の母親の子育て不安に関する研究．北日本看護学会誌，1(1)，9-16．

表1 S 保育園の特徴

- ・保育士は11名で、在日韓国人と日本人、アルゼンチン人の保育士が勤務している。
- ・保育士は、必ずしも全員がハングルが話せるわけではなく、ほとんど日本語で園児と会話する。スペイン語・ポルトガル語を話せる保育士が1人いる。
- ・入園や保育の相談をスペイン語、韓国語、英語で行うことができる。必要に応じて北京語、タガログ語、ポルトガル語が準備できる。
- ・子ども達の来園や退園の挨拶は、基本的には「アンニョン（ハングルで安寧の意）」である。
- ・韓国・朝鮮以外のルーツをもつ子どもや保護者には、「アンニョン」と共に、その母子の母語で挨拶をする。
- ・食事やおやつの際はお祈りがあり、「いただきます」などの挨拶はハングルで行われる。
- ・子ども達は、親が拒否しない限り、本名で名乗る。
- ・園内に飾られる園児の氏名（例：絵の名前、誕生日の名前、道具箱の名前など）は、両親の母語で記載される。（国際結婚の場合は、両親の母語両方を併記）
- ・両親と保育園の連絡帳（お帳面）があり、6カ国語に対応する種類がある。母親は母語で記載する。保育士は、母親に合わせて、ローマ字やひらがななどで記載する。
- ・保育園からの手紙や園内のポスターは、易しい日本語で書いてあり、漢字には必ずひらがなでルビがふられる。
- ・園内には、各国の人形や道具が展示され、各国の童謡をその国の母語で書いたポスターが貼られている。
- ・秋に行われる運動会では、園児、保護者の一部、保育士が韓国の民族衣装を着て、韓国のプンムルノリ^{注1}を踊ったり、フィリピンやブラジルの歌に乗って、全員でお遊戯をする。
- ・サマーパーティやOB会など、保護者同士の交流会が行われる。
- ・卒園していった子ども達が安心して過ごせるように、小学校と話し合いを行うなど連携している。

資料「Hello friends 227」（2002年7月発行）ならびに筆者の観察により作成。

注1 プンムルノリ・・・韓国の代表的な民俗遊びの1つである。プンムルノリはとても多様な性格を持っている。広い所で音楽を鳴らし踊りを踊るときは舞踊音楽になるが、町の祭祀を行うときにするプンムルノリは神に捧げる音楽になる。農村で厳しい労働をするときには、疲れを取り多数の動作を統一させる行進曲の役割を果たし、豊作や豊漁に対する感謝祭を開くときは祝楽になる。S 保育園では、韓国の民族衣装を着て、チャングやチンなどの韓国打楽器を使ったりしながら円になって踊る。

表2 韓国人の母親の「現在子育てについて悩んでいることや心配なこと、意見」

| | |
|----------------|---|
| 言葉について | <p>子どもにはできるだけ韓国語を教えたいが上手くいかない。 韓国語で話しかけても日本語で答えるので、合わせてしまう。 韓国に帰るチャンスを作ろうと思っている。 いつ韓国に帰るかもしれない。その時、子ども達が韓国語をよく理解できないのではないだろうか、韓国の学校でいじめられるのではあいだろうか、と心配。 もちろん私達は韓国語を教えて理解させているが、子どもが日本で生まれて日本の生活をしているので、ますます韓国語を話さなくなるのではないかととても心配になる。 ハングルを忘れてしまうことが一番心配。 子どもが数カ月の保育園生活で日本語がものすごく上手くなってしまった。今は自宅でも日本語で話そうとするので、親は子どもが日本語で話すときには答えないようにしている。帰宅してからはハングルで話しているが、これで大丈夫かなと気になる。それでも今はこの方法しかないと思って、子どもに話す時だけはハングルを使っている。</p> |
| 文化や習慣について | <p>日本の生活に慣れない。日本人との付き合いが難しい。 韓国に帰りたいが、帰れない。 日本の文化についてくわしいことがわからないので、何とも言えない。 子どもを保育園に行かせたら元気になった。 保育園で自然と親しむ活動が多いので、本当に元気になった。 日本は自然との関係を大切にしながら上手く利用しているのを感じた。</p> |
| 子どものアイデンティティ | <p>韓国人として生きて欲しい。 それが基本になって、多民族・多文化が理解できる人になって欲しい。 日本にいつまでいられるかわからないが、もう少し大きくなるといんな事について聞かれたり悩んだりすると思う。それは韓国人として日本で住むことが一番の理由だと思う。 それでも子どもが自分自身について堂々と思うように応援します。ママもパパも良いモデルになるよう頑張っています。</p> |
| 夫やパートナー、家族について | <p>共働きで、仕事や育児、家事のことが自分に重くかかっている。よって、疲れと不安に悩んでいる。それが育児にも響いていると思う。 主人の協力が何よりも望ましい。 パパは優しい。 日本に来てからは、子どもの事について話を良く聞いてくれる。それでもいつも忙しいので子ども達と一緒に遊んであげないので、悪いなと思っている。なるべく時間がある限り、子ども達と一緒にいることを作ろうとしている。</p> |

対象者全員の意見を抜粋して記載。

表3 日本人の母親の「現在子育てについて悩んでいることや心配なこと、意見」

| | |
|----------------|--|
| 言葉について | <p>「バカ」「ふざけんなよ」などの悪い言葉をよく使っているのが気になる。兄がいるので仕方がないと思っているが、よく注意する。</p> |
| 文化や習慣について | <p>日本で生まれ育つと自分が日本人であることを自覚し考える事がないので、今の環境は恵まれていると思う。 身近にいるお友達を通して世界に目を向けられれば良いなと思っている。自分と違う習慣や文化をもったお友達を受け入れ、一緒に成長できる子であって欲しい。ただ、残念なのは日本の古き良き習慣や文化が失われつつあるということ。子どもに伝えられる親がどのくらいいるのだろうか？</p> |
| 子どものアイデンティティ | <p>年齢からみて自己表現がストレートである。特に興味を持ったことに対する集中力はすごいと感じる。 それを時にはめんどくさいと思いながら受け止めてあげる余裕をもちたい。</p> |
| 夫やパートナー、家族について | <p>夫や近くにいる両親は子育てに積極的に参加してくれるので助かっている。自分の周りで支えてくれている人たちが子育てに関して自分と同じ考え方であることが一番うれしいし、安心して預かってもらっている。</p> |
| その他 | <p>仕事も忙しく、育児との両立は大変だと思っている。 でもこの時は一度しかないので精一杯やっているつもり。子どもは全員かわいくてしょうがない。いろいろなことがあるが、毎日新たな発見がある。それを見つけるのが楽しい。子どもはやがて自立し親元を巣立っていくので、それまで楽しませてもらうと思っている。</p> |

対象者全員の意見を抜粋して記載。